

第105回 三方限古典塾（'15, 7, 16）

洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3－22）

1 節義の人は、^{すく} 済うに^{わちゆう} 和衷を以てせば、^{わず} 纔かに^{ふんそう} 忿争の^{みち} 路を^{ひら} 啓かず。功名の士は、^{こうめい} 承くるに^{けんとく} 謙徳を以てせば、^{はじ} 方めて嫉妬の門を開かず。 前集 210

（意訳） 節操が固く厳しい人は、穏やかに打ち解け協調する心を補うことができれば、そうするとはじめて無用な争いをしないですむ。功績や名誉を重んずる人は、人に譲り遜る謙遜の徳を身につけると、そうするとはじめて人の嫉みや妬みを受けないですむ。

（余説） 無用の争いや妬みは、すべてつまずきの元になります。自分を直視して欠けているものを認識し、それをいかにして補い調和を保つかは、人生の大切な心がけです。ここでは、協調して和する心と、謙遜の徳がそれだと教えています。

よく「謙譲の美德」といいますが、現実にはとても難しいものだと思います。表面では譲り譲っているように見えても、その裏には己の優位を誇る心や虚栄・売名などが潜んでいる場合が多々あります。どうすればそうならないですむのかですが、ひとつには「自分本位の心・利己心を去ること」だと言われますが、いかがでしょうか。

（参考） 聖徳太子・十七条憲法「和を以て貴しと為し、忤ふること無きを宗とせよ」
プラトン「人間は、謙遜を忘れて傲慢になって、墮落する」
カーライル「利己心は、全ての過失と不幸の源泉となる」

2 天は一人を賢にして、以て衆人の愚を誨えんとす。而るに世は反りて長ずる所を^{たくま} 逞しくして、以て人の^{たん} 短を^{あら} 形わす。天は一人を富ましめて、以て衆人の^{こん} 困を^{すく} 濟わんとす。而るに世は反りて有する所を^{さしはさ} 挟みて、以て人の^{あなど} 貧を^{あなど} 凌る。 前集 213
真に天の戮民なるかな。

（意訳） 天は、多くの中から一人を選んで才能を授けて、多くの人びとを教育する義務を負わせている。だが天のその意図とは反対に、その才能を鼻にかけて他人の短所をあげつらっている。また、天は一人を選んで富者にして、彼に多くの貧者を救済させようとしている。だがその意図とは反対に、世の中の富者は自分の財産を鼻にかけて他の人の貧困を侮っている。このような人たちは、天の罰を受けるべき大罪人である。

（余説） 富者には富者、エリートにはエリートとしての天が定めた責務があるとの認識です。選ばれし者の責務をフランス語で「noblesse oblige ノーブレス・オブリージュ」と言います。また、企業の社会的責任 corporate social responsibility (CSR) についても同様です。先日、県と市に20億円の寄付を申し出た稲盛和夫氏を思い出します。

貧しい者が富める者から施しを受けた場合、感謝すべきなのは、功德を積みかせてもらった施した側だとするのが社会通念となっている民族もあるようですが、私たち日本人にはなかなか分かりづらいところです。

（参考） 菜根譚前集121「己の長を以て人の短を形すこと母かれ」
論語・堯曰 499「子曰く、命を知らざれば、以て君子と爲すなきなり」（命＝天命）
孟子・万章上「長を挟まず。貴を挟まず。兄弟を挟まずして友たり」
（年齢の長幼・身分の高下・兄弟の状況などに拘らないのが真の友だ）

3 人を責むるには、無過を有過の中に原ぬれば、則ち情は平らかなり。己を責むるには、有過を無過の内に求むれば、則ち徳は進む。 前集 219

(意訳) 人の過失を責める際には、過失を指摘しながら、同時に、過失のなかった部分を探し出して、温かい目で見ると、相手の心に不満が生じずに聞いてくれる。

自分を反省するときには、過失はないと思いこんでいる中から、あえて過失を探し出すようにすると、人間的にも一段と成長するであろう。

(余説) 人を戒め諭すことは、時を見ることが大切です。他者には厳しくても、ともすれば自分には甘くなりがちなのが人の常であり、自己を反省する際にはこれくらいの厳正な心がけをもってすれば、ちょうど釣り合いが取れるものかもしれません。新約聖書マタイ伝には「汝ら人を裁くなかれ。そは汝らが裁かれざらんためなり」とあるそうです。

今年のNHK大河ドラマ「花燃ゆ」で安政の大獄で処刑された吉田寅二郎(松陰)の語録にも「自分の価値観で人を責めない。一つの失敗で全て否定しない。長所を見て短所を見ない。心を見て結果を見ない。そうすれば人は必ず集まってくる」があります。

他人の心や行為を責める前に、自分の心や行為を自分自身で厳密に振り返り反省することができるように心がけたいものです。

(参考) 葉根譚前集122「人の短所は、曲に弥縫を為すを要す。如し暴きて之を揚ぐるは、是れ短を以て短を攻むるなり」(弥縫：細かに心を配って取り繕うこと) 六然訓句「超然任天・悠然楽道・毅然持常・藹然接人・嚴然自肅・泰然処難」

4 桃李は艶なりと雖も、何ぞ松蒼柏翠の堅貞なるに如かん。梨杏は甘しと雖も、何ぞ橙黄橘緑の馨冽なるに如かん。信なるかな、濃夭は淡久なるに及ばず、早秀は晩成するに如かざるや。 前集 222

(意訳) 桃や李はあでやかな花をつけるが、松やコノテガシワが四季を通じて常に青々と堅く操を守っているのには及ばない。また、梨や杏がいくら甘くて美味しいといっても、橙や蜜柑が放つ香気の澄みきった芳しさには及ばない。

実際、濃艶で短命なものは、地味で長持ちするものには及ばず、早く成長するものは、遅くじっくり成就するものには及ばないというのは、まことに真実ではないか。

(余説) ここでは、花や木に例えて人物の見方について述べています。昨年に映画放映された「蝸ノ記」著者・葉室麟の「橘花抄」(新潮文庫)は、黒田官兵衛(孝高・如水)の嫡男長政が藩祖とする筑前黒田藩の三・四代藩主に関わる騒動を描いた小説ですが、己の信ずる道をどこまでも貫く男や、一途に誠実に生きる女たちの姿が、橙黄橘緑の如く清新清冽に描かれ、「蝸ノ記」同様、読後には自らもそのような澄みきった香気に浸った感じが残りました。葉室麟作品の真骨頂です。また、「早秀は晩成するに如かざるや」とは言え、孔子は「四十歳、五十歳になっても芽のふかぬ者に、期待するのはもう無理だろう」と言い遣していますので、そこには限界がありそうです。

禅語「松樹千年の翠」は、松に尊い仏の姿を想い、長寿と節操のシンボルとします。

(参考) 論語子罕227「四五十にして聞こゆるなきは、斯れ亦た畏るに足らざるなり」

昭和天皇「降り積もるみ雪に耐へて色変えぬ松ぞ雄々しき人もかくあれ」敗戦直後